

# 時代を生き、歴史を支えた人びとと出会う

## ■ 歴史上の人物

指導的な人物だけでなく、さまざまな分野・階層の人びとの生活や社会的な業績を叙述しました。子どもも多く登場し、生徒の共感を呼び起こせるようにしました。



### (10) 職人歌合の世界 — 産業の発展と惣村 —

「職人歌合」から人びとの声が聞こえてくる。このころ都市や村はどのように変わっていったか。

#### ■ 帯と扇のネットワーク

京都の絹織物は、中国から輸入したものに次ぐ高級品でした。その原料の生糸も、おもに中国から輸入していました。生糸を染め、帯に織るのは、女性の仕事でした。織った絹織物を手広く売る女性もいて、帯座の亀屋五位女は、京都の広い範囲で、帯を売る権利をにぎっていました。

扇づくりも、女性の仕事でした。布袋屋立了尼は、3人の女性をやいと、自分も扇をつくっていました。彼女は扇座の長として、京都での販売権の半分をおさえていました。扇は、暑いときとおどろきだけでなく、行事のときにも、しばしば用いられました。有名な絵師が絵をかいたものには、高い値段がつけました。また、中国や朝鮮に数多く輸出され、朝鮮との交易では、扇5本が、虎の皮1枚と交換されています。

#### ■ 銭が行き交い、栄える京都

15世紀になると、京都は、公家・武家・商工業者が住む大都市になりました。全国から物資が集まり、交通の要所では、馬借などの運送業者が活動しました。また、銭の貸し借りもさかんになりました。銭をあずかったり貸したりする業者は、土倉とよばれました。このころの京都には、多くの土倉があっ

土倉の利益  
月ごとの利息で、ぶつう土倉にあずかる場合は2%、土倉から借りる場合は5~6%だった。利息の合計が、借りたときの金額を上まわっていったりすることがあった。

帯をつくる女性、油を売る商人の姿から、社会の基底を成していた座や惣村の活力に迫ります。



要でした。借金を返せなかった人の土地などは、土倉のものになりました。

また、各地に特産物が生まれ、全国に売買されました。この時代につくられた職人歌合には、さまざまな手工業者や商人が、えがかれていて、彼らは、同業者ごとにとまどって、座とよぶ組合をつくり、朝廷や幕府に税を払うことによって、営業を独占する権利をえていました。



各地方の特産物

#### ■ 自治の村々 — 惣村

14世紀から、地方では村の自治がすすみました。これまでと違って、あまり田畑をもたない村びとや若者も、村の運営に参加するようになります。オトナなどの指導者を中心に、組合を開いて、おきてをつくったり、もめごとを解決したりしました。おきてをやぶると、村からの追放や死刑などの厳しい罰が、あたえられることもありました。裁判や警察の仕事も、公家・寺社や地頭に代わって、村総ぐるみ、自分たちでおこなうようになりました。このような、自治をおこなう村を、惣(むら)とよびます。

室町時代には、三毛作が西日本を中心に広がります。肥土として大切な、草や木の葉をとる林野の管理や、用水の手入れも、共同でおこないました。田植えなどは、働き手の出しあいもおこないました(結)。さらに、惣の手で年貢を納める村も多くなってきました。

#### — 油商人、国々を行く —

室町時代の夜は、灯火によって、じよじよと明るくなっていった。寺社の灯りの油も、えごまの葉を、木の道具でしぼってとったものだった。油商人たちは、薪田の油を運んでえごまを仕入れ、薪田でとっていた。薪田は、薪の産出量の多い地域に集中していた。薪田の油を運ぶ船は、(薪田)を運ぶ船として、えごまを運ぶ船が薪田の油に、1日に30回以上も入港していたといわれています。



薪田の油を運ぶ船



### (2) 綿花と底めけタンゴ — 産業の発展 —

底めけタンゴにはどんな工夫があるか。それで栽培された綿花(木綿)は、暮らしをどう変えたか。

#### ■ 穴のあいた桶

河内(大阪府)の村々では、17世紀末には、綿の栽培がさかんになりました。水田を綿田につくりかえる百姓も多くありました。秋の収穫のころになると、村は、はじけた綿の実で一面真っ白になりました。

綿を育てるには、多くの水と肥料が必要でした。この地域の百姓は、綿に水をやるために、独特の桶を工夫しました。桶の底に十円玉より大きめの穴をあけ、筒状の布をたらしませます。この桶を「底めけタンゴ(担桶)」とよびました。百姓は担桶を持って、畦の間に歩き、桶の中にある棒を引上げてせんを開けて水をやりませます。綿の苗がのびはじめたころは、葉をなでるように水をかけ、大きくなるまで根元にかけました。百姓は、肥料に人糞尿(下肥)や、イワシをゆで干したものを(干糞)、ニシンから油をとった殻(カサ)を買い、大量に使いました。下肥は町から、干糞は九十九里浜(千葉県)や紀伊(和歌山県)、カサは東海地方(北海道)から運ばれてきました。

#### ■ 綿花は村を変える

綿づくりは、手間や肥料がかかりますが、上手に育て、天候にめぐまれば、米をつくるよりずっと多くの現金収入が得られます。村の女



綿の花と綿花(綿のたねを包む白色の綿鈴)



底めけタンゴ(大阪府河内郡河内町河内町立歴史民俗資料館蔵)



河内の農家(河内郡河内町河内町立歴史民俗資料館蔵)

性は、糸車(木綿)を使って綿糸をつくる賃稼ぎをしました。豊かな家では錠織を置き、錠織(綿布)をつくりました。綿糸や綿布を百姓から仕入れ、大阪の木綿問屋に売る、村の商人がふえました。河内の綿糸や綿布は、河内木綿として全国に知られました。

綿づくりが各地に広がる中、木綿の染料となる藍の栽培がさかんになりました。また、灯りに使う油の原料となる菜種の栽培や、養蚕もさかんになりました。綿糸や生糸は、国内生産でまかなえるほどになりました。売って現金を得るための作物を、商品作物とよびます。このほか、酒・しよゆ・みそづくりなどが発展し、これらが大阪や江戸、さらに地方の都市に運ばれました。また、鉱業で金の産出量がふえましたが、17世紀中ごろには、銅の生産がのびました。

#### ■ 木綿と人びとの生活

木綿は、それまでの長い間、衣服の素材であった絹に比べ、はだざわりがよく、温かでした。あざやかな色に染めやすく、安価な衣服として、百姓や町人、さらには武士のふだん着として広まりました。足袋やめくなど日用品にも、木綿が使われました。また、木綿は綿の改良につがり、ニシンやイワシなどの魚骨がふえました。さらに船の帆に使われ、横風や油風にも強いため、遠距離の航海ができるようになりました。海上交通の発展が、全国の物資の輸送を変え、人びとの生活に影響をあたえました。

#### — 新田開発と新しい農具 —

17~19世紀には、用水路をいり、開墾がすすんで、各地で新田開発がすすみました。この結果、全国の生産が70%から2500万石とよくなりました。また、新しい農具が工夫され、広まりました。早稲こきは、器人(器)の歯で米をこき取るこきばしに比べ、作業時間は10倍以上も上った。ほかにも、土を深く耕すことができる中耕鋤が開発された。



綿の主な生産地



木綿の帆を使った船



こきばし(徳島県徳島市河内町河内町立歴史民俗資料館蔵)



中耕鋤(徳島県徳島市河内町河内町立歴史民俗資料館蔵)